

「保護貿易」か「自由貿易」か

現代も資本主義である、「」を忘れまい(二)

「米国第一」主義を前面に掲げたトランプが、アメリカ新大統領に就任した。ブルジョア・マスメディアの大方は、このスローガンが、お気に召さないようにみえる。

だが、「自国第一」主義は、ある意味では、国家独占資本主義としての現代資本主義（現代帝国主義）の諸列強、そこにおける各国独占資本とその国家に共通する階級の本音を、露骨に粗々しく表明したまでに過ぎない、と言うこともできるであろう。

どの国の独占資本とその国家も、「国益」と称しつつ、実際には、自国の独占資本の利潤と権益を、第一義に、最優先して、確保、拡大しようとする点で、何ら変りないからである。TPPという多国間協定の形をとろうと、そこを離脱して、「米国第一」の二国間協定という形をとろうと、その階級の内実と意図に変わりはない。いずれにせよ、いかにして自国独占資本の独占利潤（搾取）とそのための内外市場を、最大限に確保・拡大するか、という点ではまったく同じである。

また、マスメディアは、「自国第一」主義を、「保護貿易」（輸入規制、関税強化など）＝悪、対するにTPPなど、「自由貿易」＝善と見做すのが、お好みのようにみえる。

たとえば、こう述べている。

「トランプ氏の孤立主義、保護（貿易）主義は、第2次大戦前の米国や世界の暗黒時代を思い起こさせる。戦後の米国外交は、大戦前の反省にたち、国際主義が基軸だった。今、米国は戦後最大の転換点にさしかかっているのかもしれない。

識者の中には、トランプ氏が任命した閣僚が保護主義・孤立主義ばかりではないことや、米議会には共和党を中心に自由貿易派も多いことから『戦前のような極端な保護主義には戻らない』との楽観論も少なくはない。（アメリカ総局長「孤立主義の歴史くり返すのか」、『朝日』、一・一二）。

かつて、マルクス、エンゲルスは、「自由貿易」に原則的支持の態度を表明したことがある。

その根拠の第一は、資本主義の生成・発展期において、いまだに多かれ少なかれ残存する、とつくに桎梏（しっこく、手かせ足かせ）と化した封建的生産関係・遺制からの生産力の完全な解放ということ。第二に、それによる労資間の階級闘争の諸条件の成熟ということである。この意味で、そして、この限りで、当時の「自由貿易」は、一定の歴史的進歩性をもっていたからである。

だが、現今の「自由貿易」には、こうした歴史的進歩性はひとかけらもない。現今の「自由貿易」は、総体として基本的に一個別の具体的事例としては、例外的なものもありうる―、一握りの独占資本の利潤と権益を、最大限に確保しようとするものであり、そしてこれによって、とつくに生産力発展の桎梏と化した資本主義という生産

関係を、あくまで維持・延命しようとするものだからである。この意味で、「保護貿易」だけでなく、「自由貿易」も、独占資本とその国家による反動的政策の「二つの異なった表現」にすぎない。

以下の引用は、マルクス・エンゲルスの貿易論の紹介の結びとして筆者が、四〇年ほど前に書いた文章の一節である。年数は経っているが、背景としての資本主義の歴史的發展段階―国家独占資本主義としての現代資本主義（現代帝国主義）としては、四〇年前の当時も今も、基本的に変わりないから、「自由」貿易、「保護」貿易をめぐる基本視点は、ほぼそのまま当てはまる、といつてよいであろう。

「以上あきらかなように、マルクス・エンゲルスは、自由貿易が『できるかぎり自由かつ急速な生産力の発展拡大』、それにとりまなう労働の階級分化・対立の発展を促進し、こうして階級闘争と社会主義移行の一般的諸条件のより急速な成熟を促す『経済的媒体』であるという『理由のために、そしてただこの理由からのみ』、自由貿易を『究極的にかつ原則的に』支持したということである。ただこの場合、問題の背景をなす歴史的時期は、資本主義が、独占資本主義段階におけるようにつとに生産力発展の桎梏をなすにいたった時期ではなく、反対に、資本主義が生産力発展に照応しえた時期であり、しかも生産力の発展の封建的桎梏と封建的残滓を多かれ少なかれなおとどめていた時期であったこと、を歴史的に正しく考慮に入れるべきことはいうまでもない。

つまり、当時の自由貿易か保護貿易かという問題は、今日いわれる貿易の「自由化」や国内産業保護を口実とする関税（カルテル関税）とは、その歴史的内容がまったく異なっており、後者の場合はいずれも、独占資本の反動的政策の二つの異なった表現にすぎない。したがって今日では、われわれがそのいずれかを『究極的にかつ原則的に』選択し支持するなどということは原則としてありえない」（拙著『マルクス財政論』、新評論、一九八〇年、一五四頁）。

（経済学者・小林 晃）

経済学批判としての『資本論』（中）

『賃労働と資本』のエンゲルスの「前書き」を読む

労働と労働力をめぐって

（五）『資本論』と剰余価値の秘密

岩波文庫版では『空想より科学へ』の第二章は、「弁証法的唯物論」と見出しがつけられています。その最後のセンテンス（『反デューリング論』では序説の第一章「総論」）は、皆さんご案内のように、余りにも有名です。それは、次の通りです。

「この二大発見、すなわち唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれがマルクスに負うところである。社会主義はこの発見によって一つの科学となった。そこでこの科学はこれについて、その細目と関連とをヨリ十分に研

究しなくてはならぬ。」(岩波文庫63頁、岩波文庫『反デューリング論』上47頁)

エンゲルスは『ドイツ農民戦争』の第三版の序文でも次のように述べます。「あらゆる理論的な問題をいよいよ明瞭に理解し、伝統的な、そして古い世界観の産物であるおきまり文句の影響からますます離脱し、かつつねに社会主義はそれが科学となつたからには一つの科学としてとりあつかわれなければならない、すなわち研究されなければならない、ということをお頭においておくこと、それは指導者の義務であろう。そしてかくしてえられ、いよいよ明白にされた見識を労働大衆のあいだにますます熱心にひろめ、党や労働組合の組織をますます強固に結成することが重要であろう。」(『ドイツ農民戦争』岩波文庫35頁)と。

「唯物史観」と「剰余価値による資本主義的生産様式の秘密」の発見によって、「社会主義」は「一つの科学」になつたのだから、自覚した人達がすべきことは、科学となつた社会主義について、「その細目と関連とをヨリ十分に研究」し、「明白にされた見識を労働大衆のあいだにますます熱心にひろめること」であり、「労働者党や労働組合」の組織を、その「見識」によつて強化することが必要だと、説いているのです。

まずは、世の先駆けたる人間の任務は、「唯物史観」、すなわち「史的唯物論」、そして、「剰余価値による資本主義的生産様式の秘密の暴露」である「剰余価値論」を正しく理解し、さらに、これらの「細目と関連とをヨリ十分に研究」することだと言うのです。

剰余価値を知るには、価値について正しく理解しなくてはなりません。「価値論」そして「剰余価値論」、そして、「資本主義的蓄積の一般的法則」が理解されるのです。

(六) 『賃労働と資本』の「前書き」 ① 『新ライン新聞』との関係

マルクスやエンゲルスに限らず、それが文学書等々であっても、古典を理解するには、読むに当って、それ等が書かれた歴史的背景や、書かれた経緯を知っておくことは、とつても重要で大切なことだと思ひます。

出版されてきた『賃労働と資本』は、岩波文庫版であれ新潮社の『マル・エン選集』であれ、労働大学版であれ、はたまた国民文庫版、新日本文庫版、青木文庫版、角川文庫版等々には、一八九一年四月に書かれたエンゲルスの比較的長い「前書き」(後で紹介しますがエンゲルスは、カウツキーへの手紙で、「弁明のための前書き」と言っています。)が冒頭に置かれています。そして、この「前書き」は、言うまでもなく重要です。どのくらい重要かは、「前書き」の全文をぜひとも読んでもらうのが一番でしょうが、少しく説明させていただきます。

まず、冒頭で、『賃労働と資本』の書かれた経緯が述べられますが、「一八四九年四月四日以後の『新ライン新聞』に、「一連の論説として」書かれたもので、その元になつたものは「一八四七年にブリュッセル独逸人労働者協会で行つた講演」だという訳です。(『賃労働と資本』岩波文庫/19頁)そして、『マルクスIIエンゲルス略年譜』(国民文庫24頁)によると、十二月十七日にロンドンからブリュッセルに到着

したマルクスは、十二月下旬に、十二月末にパリへ帰るまでの間に講演したようです。

『新ライン新聞』に五回にわたって連載された「賃労働と資本」ですが、どのように連載されたかについて、岩波文庫版だけ読んでいたのではわかりませんが、『マル・エン全集』第六巻所収の「賃労働と資本」に目を通したり、長坂聡訳の労働大学版で勉強してみると、よくわかります。整理してみますと、次の通りになります。

- 第一回 一八四九年四月五日／『新ライン新聞』二六四号
(岩波文庫版 37頁／47頁／1行)
- 第二回 一八四九年四月六日／『新ライン新聞』二六五号
(岩波文庫版 47頁／2行／56頁／6行)
- 第三回 一八四九年四月七日／『新ライン新聞』二六六号
(岩波文庫版 56頁／7行／64頁／6行)
- 第四回 一八四九年四月八日／『新ライン新聞』二六七号
(岩波文庫版 64頁／7行／73頁／9行)
- 第五回 一八四九年四月一日／『新ライン新聞』二六九号
(岩波文庫版 73頁／10行／86頁)

第一回は、マルクスの前置文と「第一章」に当る「労賃とは何か？それはいかにして決定されるか」と言うマルクスによる見出しがあります。

第二回は、マルクスによる「商品の価格は何によって決定されるか？」という見出しがあります。(以後はマルクスによる冒頭での見出しはなく、岩波文庫版ですとひたすら切れ目なく続きます。)

第三回は、見出しはありませんが、「資本とは何か？」が語られます。

第四回、これも見出しはないですが、内容的には、「資本蓄積の賃労働への影響」で良いでしょう。

第五回は、文中に見出しと言える文言が「生産的資本の増大は、労賃にいかなる影響をおよぼすか？」(『賃労働と資本』岩波文庫／74頁)というようにあります。

このように整理してみると、理解が進むように思います。そして、連載第一回目には、『賃労働と資本』の本来の全体構想も述べられていますので、眼を通されると良いと思いますが、エンゲルスの「前書き」に記されているように、実際には『新ライン新聞』の発行禁止に伴い、『賃労働と資本』としての続きは書かれませんでした。

(七) 『賃労働と資本』の「前書き」 ②エンゲルスの施した「変更」

私たちが通常手にする『賃労働と資本』には、一八九一年四月三十日付けのエンゲルスの「前書き」が付けられています。繰り返しになりますが、これは大切であり、重要であります。

エンゲルスは、『賃労働と資本』の新版を「ほとんど専ら労働者間での宣伝を目的

てと」して、すなわち労働者教育の為の「パンフレット」として「一万冊以上」も出版するのならば、「変更」すべき「一点」があるというのです。

エンゲルスはその理由について、『新ライン新聞』誌上に「賃労働と資本」が書かれた（二八）四〇年代には、マルクスはまだ彼の経済学批判を終結していなかった。それが終結したのは、やっと五〇年代の終わりころであった。だから第一冊『経済学批判』（一八五九年）以前に現われた彼の諸著述は、個々の点では一八五九年以後の諸著述と相違しており、のちの諸著述の見地からすればいかがわしく、かつ誤りさえ思われるような表現や全命題を含んでいる。」と言っています。そして、「マルクスが一八四九年に書き下したパンフレットではなく、ほぼ、彼が一八九一年に書いたであろうパンフレット」（『賃労働と資本』岩波文庫20（21頁））として、刊行することが求められていると言っています。

さて、ここからは本当に重要です。「変更」する「一点」は、「全経済学上の最も重要な点の一つ」とエンゲルスは言うのです。これについての説明は、次の通りです。

「私の変更はすべて一点をめぐっている。原文によれば、労働者は資本家にたいし、労賃とひきかえに彼の労働を売るのであるが、本書によれば、彼の労働力を売るのである。そしてこの変更のゆえに、私は解説の義務がある。労働者たちへの解説、——ここに横たわるのは単なる文字拘泥ではなく、むしろ全経済学上の最も重要な点の一つであることを、彼らが認めるための。ブルジョアたちへの解説、——極めてむづかしい経済学的説明でも容易に理解できる無教養な労働者たちが、かかる厄介な問題を一生涯ときえないわが高慢ちきな、「教養階級」に比べてどんなに優越しているかということを、彼らが納得しうるための。」そして次のように続けます。「古典派経済学は、工場主は彼の労働者たちの労働を買い、かつ支払うのだという、彼の普通の考えを産業的実践から受けついだ。こうした考えでも、工場主の商習慣、簿記および原価計算のためには全く十分であった。素材にも経済学に移し入れられると、それはここで、まったく驚くべき誤謬と混乱とをひき起こした。」（『賃労働と資本』岩波文庫22頁）と。

「経済学」に「驚くべき誤謬と混乱とをひき起こした」のは、「労働力」でなく「労働」を買う、としたところにあると言っています。ですから、「最上の経済学者たちでも「労働」の価値から出発した限りではつまずいた困難、——この困難は、われわれがその代りに労働力の価値から出発するや否や消滅する。労働力は、われわれの今日の資本主義社会では一商品であり、他のの商品とも同じように商品であるが、しかしながら全く特殊な商品である。すなわち労働力は、価値の源泉だという、しかも適当に取り扱えばそれ自身の有する価値よりも多くの価値の源泉だという、特殊の属性たる価値創造力をもっている。」（『賃労働と資本』岩波文庫32頁）と説明します。

マルクスの『資本論』が、「経済学批判」である為には、労働と労働力の違いをしつかりさせておくことは、必要不可欠だったので。そうでなくては、「剰余価値の秘密」に到達しません。

『社会通信』の読者の皆様にはよく知られている『経済学入門』ですが、小島先生は次のように書かれています。

「いま一つはつきりさせておくべきことは**労働力と労働**とのちがいである。労働者は労働力を売っているのであって、労働を売っているのではない。したがって資本家の支払うのも、労働力の代価であって、労働の対価ではない。資本家はあたかも労働者に労働の対価を支払っているかのようになり、一般にそう考えられていることが多いが、実際に支払われているのは労働の対価ではない。労働力の代価である。この点にはなにもおいてもまず確認しておいてもらいたいのである。」（『経済学入門』労大新書69〜70頁）と。ここでは、あえて「**労働力と労働**」という文言を、ゴシック体にされています。

『経済学入門』の「資本家は労働力を買う」（68頁）、つづいて「労働力の価値」（70頁）、そして「労働者は労働力の価値以上の価値をつくりだす」（71頁）を、よく読んでいただければ、私が拙い説明をする必要はないでしょう。

さて、『賃労働と資本』の「前書き」は、一八九一年四月三十日付けとなっていることは前述のとおりです。

これに先立つ三月十七日、エンゲルスはカウツキーに手紙を書いています。その内容で注目すべきは、なぜに「前書き」が必要なのかという理由について書いている箇所です。前述の「弁明のための前書き」と記した書簡です。

曰く、『賃労働と資本』はまだ剰余価値論以前の用語で書かれているので、今日一万部の宣伝書ではとうていこのままにしておくことはできないからだ。だから、僕はこれを今日の用語に改めて、弁明のための前書きをかかなければならないのだ。」（『資本論書簡』（3） 国民文庫233頁、『マル・エン全集』第38巻31〜32頁）

そして、三月六日付のポール・ラファルグ（☆ご案内のように、『空想より科学へ』は、マルクスの娘婿のラファルグの依頼によって、まずはフランス語で刊行されました。）宛ての手紙には、「剰余価値。これに関するいっさいは、『資本論』第二巻の私の序文のなか」に「述べてあります」とあります。（『資本論書簡』（3） 国民文庫232頁、『マル・エン全集』第38巻38頁）ここで言う「序文のなか」とは、次の箇所です。

「そこに、マルクスが現れ、「全経済学を变革すべき使命をもつ、そして全資本主義的生産の理解のための鍵の使い方の心得あるものに提供する、一つの事実」を「手掛かりとして、彼はすべての既存の範疇を吟味した。」そして、「剰余価値が何であるかを知るためには、彼は価値が何であるかを知らねばならなかった。リカードの価値論そのものが、まず第一に批判のもとに置かれねばならなかった。かくして、マルクスは、労働を研究してその価値形成的性質に達した、そして初めて、いかなる労働が、また何ゆえに、かっいかにして、価値を形成するかを確定し、また一般に価値なるものは、この種の労働の凝固したものにはかならないことを確定し」、「次にマルクスは

商品と貨幣との関係を研究して、商品と商品交換がいかにして、また何ゆえに、商品に内在する価値属性によって、商品と貨幣との対立を産み出さざるをえないかを論証した。この上に築かれた彼の貨幣理論は、最初の充分な、そしていまでは暗黙のうちに一般に承認されているものである。彼は貨幣の資本への転化を研究して、それが、労働力の売買に基づくものであることを立証した。彼はここでは労働のかわりに労働力という価値創造的な性質を置くことによって、リカード学派の破滅の因をなした諸難点の一つ、すなわち、資本と労働との相互交換をリカードの労働による価値規定の法則と調和させることの不可能なところを、一挙に解決した。彼は、不変資本と可変資本とに資本の区別を確立して、初めてその現実の経過における剰余価値形成過程を、微細の点まで叙述し、これを説明することに成功した。——彼の先行者のうちの何びとも成就しえなかつたところである。（『資本論』岩波文庫第四分冊30～31頁）

「労働」のかわりに「労働力」を置くことにより、すなわち、資本家と労働者との間にあるものは、「労働力の売買」であることを「立証した」ことにより、「剰余価値形成過程を、微細の点まで叙述し、これを説明することに成功した。」というのです。ですから、「剰余価値による資本主義的生産の秘密」を「暴露」〔空想より科学へ〕岩波文庫63頁）をするには、労働者が資本家に売るのは「労働」でなく、「労働力」であることの理解なくしてはあり得ないのです。『資本論』が「経済学批判」であり、科学であるための最重要点です。

『資本論』第二巻初版のエンゲルスによる序文は、一八八五年五月五日になっていきます。（この日は、マルクスの誕生日です。）したがって、エンゲルスによって、『資本論』の第四巻に当る『剰余価値学説史』の編集を委ねられたカウツキーは、理論的にも社会的にもそうした地位にあり、当然『資本論』一卷、第二巻を読み、内容を知っていたはずですし、エンゲルスの序文も知っているはずです。それにもかかわらず、前述のように、一八九一年四月三十日付の『賃労働と資本』の「前書き」を書くに先立って、三月十七日付けの手紙で、「弁明のための前書きを書かなければならないのだ。」としたためたのは、いかにこの問題が重要であるかを、カウツキーに念押ししているように受け取れるのは、私の思い過ごしでしょうか。

エンゲルスの「前書き」にあるように、ライン新聞に掲載された「原文」は「後日の全集版でふたたび元のまま複製」されています。それは大月書店の『マルクス・エングルス』全集第六巻（329～419頁）に掲載されています。全集では、エンゲルスの「前書き」に従って、「労働」が「労働力」に変更をされた箇所が分るようになっていきます。またもちろん、前述の様に『新ライン新聞』への掲載日が分るようになっていきます。

読者の皆さんで、全集をお持ちでない方は、現在入手可能な、新日本出版社刊の服部文男訳による『賃労働と資本／賃金、価格および利潤』を購入されたらどうでしょうか。欄外に「労働」が「労働力」に変更された箇所が、すべて分るように記載されています。

（二〇一七年一月二十日 中澤 秀行・つづく）

資本の本質は変わらない

資本は価値を増殖する価値である。価値増殖の秘密は労働力の売買にある。労働力の使用価値である労働は、労働力の価値を超えて富をつくる。資本主義社会にあつては、賃金制度という姿をとり、生産手段の所有者である資本家は、支払わない労働である剰余労働部分を一人占めする。

「賃労働と資本」「賃金・価格・および利潤」、あるいは「経済学入門」をなんどとなく、一〜二年をかけて、みっちり勉強した。「読了した感想はいかが」と問うと、「労働力が価値どおりに売買されれば搾取はないのですよね」との言葉をいくどとなく聞かされた。経済学の学習はこれほど難しくやっかいだ。「労働力が価値どおり」売買されることはマレであるから、賃金は多くは価値以下となる。これが「賃金制度」を律する法則である。賃金が価値以上にあるいは価値以下に支払われようと、賃金法則は貫徹される。

労働運動の目的は支払われる労働部分をふやし支払われない労働をへらすこと、つまり搾取の率を少しでも低めること、もう一つはこれこそ肝要なのだが、「賃金制度」という資本主義社会に独特の搾取のあり方を廃止することだ。

『共産党宣言』はプロレタリア階級の発展をこう述べる。

「工業の発展とともに、プロレタリア階級は数を増すばかりではない。プロレタリア階級はますます大きな集団に寄せ集められ、かれらの力は増大し、またかれらはますます強くその力を感じる。機械装置がだんだんに労働の差異を消滅させ、賃金をほとんどどこにおいても一様の低い水準にひきさげるので、プロレタリア階級の内部における利害や生活状態はますます平均化される。ブルジョア相互の競争が増大し、そこから商業恐慌が起るようになると、労働者の賃金はますます動揺する。機械装置の改良がたえずますます急速に発展するにつれて、労働者の全生活的立場はますます不安定になり、個々の労働者と個々のブルジョアとのあいだの争いは、ますます多く、二つの階級間の争いの性格をおびる。こうして労働者は、ブルジョアに対抗する同盟を結びはじめ。かれらは、その労働賃金を維持するために集会する。かれらはみずから継続的な組合を作つて、この不時の反抗のために食糧を準備する。時には闘争は暴動となつて爆発する。

ときどき労働者が勝つことがあるが、ほんの一時的にすぎない。かれらの闘争の本来の成果は、その直接の成功ではなくて、労働者の団結がますます拡がっていくことである」(岩波文庫、51頁)

ボランテティア、扶助組織

連合は一月、二〇一四年六月につくられたパンフ「連合の七つの絆—支え合い、助け合う社会づくりのために」を資料として配付した。七つの絆とは①平和、②核兵器

廃絶、③人権、④被災地支援、⑤愛のキャンパ、⑥地域・職場・家庭（メーデー）、⑦以上六つでより強固な絆をというものだ。

①②③はオバマ君や安倍君が一般論としているのと同じである。④⑤⑥はボランティア、支援でしかない。職場労働者、労働条件は放り投げられている。

連合中心組合はJ C（金属労協）、U Aゼンセン、電力総連等。製造業中心のJ Cは機械化・ロボット、そして産業構造の変化で二百万人を前後する。U Aゼンセンは過去三年間にユニオン・ショップ制を駆使し一六万も組合員をふやし一六四万とJ Cに肉迫する。U Aゼンセンは流通・サービスを中心に組織される。大会は日章旗を先頭に四七の支部旗、三つの部門旗（製造・流通・サービス）入場からはじまる。

「U Aゼンセン 二〇一七年度GUIDE」はU Aゼンセンの「階級制」を示してみせてくれる。労資関係については①企業の安定、発展なくして、雇用の安定、労働条件の維持・向上なし、②日常の業務改善や生産性向上に協力し、公正分配を求める。そして、全労連を「搾取する者（資本家）」と搾取される側（労働者）との間には、激しい対立と闘争があるだけである、という共産主義のメガネに立って活動」、全労協を「戦闘的、階級的労働運動再生めざし、ストライキを組む」と批判する。ちなみに、U Aゼンセンの綱領は友愛と信義にもとづく連帯・相互扶助、そして産業民主主義・産業の健全な発展を掲げる。まさに労資協調、産業調和、産業報国の古いイデオロギ―である。

連合記者会見で幹部は「17春闘にあつては、パターン・センターの産業はもうない、いまリードするのはサービスマ」と、春闘を主導する産業はJ CでなくU Aゼンセンとするかである。U Aゼンセン一六四万の構成は、男女比、男四一%、女五九%、正社員・非正社員比は正社員四三・八%、短時間五六・二%、規模別は一〇九九人の小企業五五%、一〇〇〜二九九人の中企業一九%、三〇〇人超の大企業二六%の「モザイク」組合である。

「産業報国春闘」四年目

政労資による「産業報国春闘」は四年目に入る。経団連は一七年一月一七日、『17年版 経労委報告』を発表した。内容は日経連時代からの主張を継続する。まずは「ベア・定昇は企業をつぶす」と企業の支払い能力を、ついで総額人件費管理こそが企業発展の第一条件と。

メディアが注目する賃上げへの姿勢には首相からの賃上げ要請にもよるのだろうか①自社の収益に見合った積極対応、②年収ベースの賃上げの前向きな検討をかかげる。これも従来どおり。連合の月例賃金要求「二%程度を基準」は経団連は蚊ほども感じていない。

17年版報告が強調するのは副題にある「人口減少を好機に変える人材の活躍と生産性の向上」である。それは第一章の企業の成長につながる働き方・休み方、第二章の労働時間、同一労働同一賃金にあらわれる。

経団連の方針はくり返すが「ベア・定昇は企業をつぶす」と、企業の支払い能力、

総額人件費管理へと労組幹部を洗脳、思想攻撃である。連合は大企業・正社員労働者の賃上げに消極的だ。経団連は「働き方」改悪で支払い労働を減らし、不払い労働を増やしたい。それが「働き方」である。

労働運動そして春闘の衰えは、「生産性三原則」にもとづく生産性向上の思想攻撃に、労組幹部、労働運動が負けていることにある。「生産性三原則」を、思想的に批判し、職場から宣伝することが求められる。

『通信』 発行

「紙」誌からインターネット移行の準備中、古い書類の山を整理した時、思わぬモノの発見です。事務所さがしのメモ（『旬刊社会通信』の日程表）です。日付は十月六日から十三日とあります。「こんなきれいな字書いていたんだ」とあらためて四年を思い出しました。

事務所は千代田区飯田橋、朝日ビル四〇一号。九・五坪で家賃七万一二〇〇円、敷金六四万円。契約完了十月十二日、他に電話工事、デザイン表紙見本、封筒見本、さらに三五の事務用品と二〇の發送関係用品の一覽表とともに。発行日は十一月一日、定価三百円（一ヶ月、半年前納制）、第三種郵便手続きの詳細と立ち上げ費用、そして毎月の運轉資金の見通し、さらに『旬刊社会通信』準備完了、十月十日」とありました。この日に、創刊号の原稿はそろっていたのでしよう。

約一ヶ月の強行軍でした。事務局さがしには当時国労本部にいた樋口俊士さん、国労組合員の吉田憲夫さんらにお手伝いただきました。誌名については坂梨正弘さん、そして誌のデザインは和氣誠さんのお力添えで岩波書店の坂口顕さんでした。坂口さんにはお礼もしないでそのままにしておりましたが、創刊二〇年の時でした、「大昔、たいへんお世話になりました。今も当時のままで発行しつづけております」と、岩波書店にお礼に出むいたこともありました。

坂口さんは「まだ続けてらっしゃるの、うれしいですね」とビックリした表情でした。そりやそうでしょう、「長続きすることあるまい」と思われたに違いありません。

『進路』の担当時代は、当時の雰囲気を反映し、部数がウンとふえました。毎日が楽しかった。楽しかったことが強行軍を可能にしてくれました。引っ越しには毎週『宣言』を中心に勉強会やっていた国労東建工分会（国鉄東京建築工事局、設計の専門家集団）の仲間が手伝ってくれました。

お金と事務について、先生は「滝野君は粗雑で錢勘定はできないだろう」と見抜かれていたのでしょう。先生のお知り合いの女性―当時小学校の息子さんが二人いらっした―を紹介してくださいました。彼女はいつまで続くかわからない不安をかかえながら、ものすごい能力を発揮して下さった。会計、購読者管理、發送すべてひとりでごなしてくれました。彼女なしには四十年はありませんでした。

發送、荷造りはつれ合いの友人の木原でうさんが協力してくれました。彼女、荷造りのプロです。ぼくが大きな郵便物をつくるものなら、さあたいへん。「滝野さん、

貧乏社長が気前よくしちやだめ、ここを切って少し小さくすれば切手代十円も節約できるじゃないですか」と大目玉です。

『進路』は十一月まで発行しつづけたから、七七年十一月は『進路』と『社会通信』を月つごう六回出したことになりました。三〇の若さですね。酒はそれまでほとんど飲みませんでした。新しい仕事でそれから一年、帰宅は日付変更線を超える毎日でした。酒の勉強の始まりはここからです。(つづく)

◇読者からのおたより◇

「再稼働反対！原発のない福井をつくろう！福井県集会」開催 「サヨナラ原発福井ネットワーク」が主催し、原発反対福井県民会議などの反原発団体が協賛し、一月二九日、福井県敦賀市で「再稼働反対！原発のない社会をつくろう！福井県集会」が開かれた。福井県内各地と関西からの参加者がこもこも、「四〇年を経過し、原発のない福井をつくろう。(高浜原発・大津地裁仮処分)大阪高裁抗告勝利を勝ち取ろう」と意思統一した。

まず集会参加者は会場前を出発して、市内を赤旗なびかせデモ行進。集会は若泉政人さんの主催者あいさつの後、福井県民会議代表の中寫哲演さんが、小浜市で三回にわたって原発建設を阻止した闘いとその後の中間貯蔵施設をストップさせた闘いを報告。「ぜひ原発のない福井県をつくる参考にしてほしい」と。そして、高浜原発至近の高浜町音海地区で昨年末高浜原発1・2号機運転延長反対を自治会決議したことに、「若狭の原発を考える会」が直ちに感謝のチラシ全戸配布をされ、原発の電気を使用したきた大都会に住むものとしての自省の念から始められ、原発地元の方々に感謝の言葉を述べられているチラシの内容に感動されたと語った。

井戸謙一弁護団長の原発問題の基礎が大転換しているという詳細・的確な裁判闘争状況報告の後、二年半前から若狭・嶺南で百回近いアメーバデモ・チラシ配布を続けてきた仰木明さんと橋田秀美さんから発言があった。橋田さんは「町から町へ、路地から路地へ、鳴り物入りでチラシ配布宣伝、署名集めもしてきた。私は二年前から参加、月二回のアメーバデモ。最初のうちは窓を閉め、拒絶反応だったが、今は駆け寄り、手を握って『ごころうさん』と言ってくださる方も出ている。美浜の人に話をしたら、『原発はいやや』とものすごく悲しい顔をされていた。自分の足と目で見、香りをかぎ、つかんできた。

今年の一月初日の音海訪問の後、翌五日にさらに目の前に高浜原発がある二つの地区を訪問した。本当に目の前に原発がある。質問したら、『そらあんた怖いで』と。わかめも取れんし、温排水を流してきて、若い人はいなくなる、と。そこに行かないとわからない臨場感がある。アメーバデモは私をいっぱい成長させてきた。京都で集会して、デモしてもわからないことだ」と。

二月には今日の皆さんで大阪高裁を取り囲む勢いで頑張ろうと、司会者のまとめで閉会した。

(さいなら原発・びわこネットワーク 稲村守)
多数激戦を勝ち抜き、無事再選 一月の市議選では温かいご支援をいただきありがとうございます。改めて心から感謝と御礼を申し上げます。ご支援に応え、議会や地域で、これまで以上に平和憲法を基本に「いのちとくらし最優先」の市政を目指し「チェックから改革」で活動していきます。

さて未来永劫にわたって個人、市民団体、労働組合の活動を取り締まる共謀罪がオリンピックでのテロ防止を口実に提出されようとしています。共謀罪は主権者である国民を取り締まるの対象とし、警察による通話やメールの盗聴を際限なく広げ、密告の奨励は冤罪の多発を招きます。こんな悪法を推進し、暗黒社会をもたらすアベ独裁政権の退場を求めて野党協力を茨木、大阪でも全力で進めたいと思います。皆様にはこれからもさまざまなご意見、要望、時には厳しいご批判もいただければ幸いです。

(茨木市議会議員・山下けいき)